

仏典の記述をどう読むか

小 谷 信 千 代

本日は仏教学会の新入会員の歓迎講演会ということになっていますが、来週も金曜の二限目に親鸞聖人のご命日勤行が営まれますから、仏教学演習Ⅰの授業が二週間続けてできなくなりますので、講演会ということではあります。授業のような形でお話をさせていただきたいと思います。皆さんのお手元にお配りしておりますのは、大阪の難波別院の依頼で、そこから出されている『南御堂』という新聞に載せたものです。それに基づいてお話をさせていただきます。

これから皆さん方は仏教学を学んで行かれるわけですが、仏教学では経典や論書などの仏典を読むことが中心になります。仏陀釈尊の教えを説くものを経、僧たちの守らなければならぬきまりを律、釈尊の教えを説明したり解釈したりしたものを論と言います。これらの仏典を読む場合に注意すべきことを多少なりとも知っておかれると、これから仏典を読んでいかれる上で何かのお役に立つことと思いい、このようなテーマでお話をすることとしました。

仏典や聖書は宗教文学というジャンルに分類される文学作品です。そういう宗教文学と呼ばれる分野に収められる作品の読み方についてお話をしたいのですが、話を分かり易くするために、それをわれわれが日常目にする新聞や週刊誌などの報道記事の読み方と比較して説明したいと思います。つまり宗教文学の記述と報道記事の記述との違いを

知っておいていただきたいと思うのです。

お経に説かれていること、あるいは今日資料として用いようとしている仏陀の伝記、あるいはキリスト教の聖書の中には、われわれにはおよそ作り話としか思えないような、現実には起こり得ないような、荒唐無稽な出来事がしばしば述べられています。宗教文学には、仏陀やイエス・キリストが様々な超能力を発揮する場面が頻繁に描かれています。そのような記述をどう理解するか、これは案外むづかしい問題です。

例えば、仏陀が悟りに到達する直前に、悪魔の大軍に打ち勝ち、悪魔の三人の美女の誘惑を退ける「降魔」の物語や、マタイ伝に説かれるキリストへの悪魔の誘惑の物語をどう理解するか。あるいは皆さんも映画でご覧になったかと思いますが、モーゼがエジプトを脱出するときに紅海が二つに割れてそこに道が現われ出て来たというような旧約聖書の記述をどう理解するか。それらを単に、仏陀やキリストやモーゼを偉人化しようとする意図による作り話にすぎないかと考えるか、それとも何らかの意図を象徴する比喩的な表現と看做すか。このような記述に出くわす度に、その意図を理解しかねて、考えあぐねてしまうことがよくあります。

仏典に説かれるその種の非現実的な記述をどう理解すればよいかが分からずに困っていたときに、ある仏教学者の言葉に接しました。その方は次のように言われます。

すべての聖典は、近代の報道記事とはまったく別の観点から書かれた。それはただの事実ではなく、宗教的事実を伝えることを唯一の使命としていたからである。他の多くの宗教文学においてそうであるように、仏教文学もまた、事実の描写という形式によって、実は宗教的真理を説いていることが多い。だから十九世紀末の実証主義的な方法で仏教聖典を見る場合には、事実を誤るのみではなくて、重要な要素を見逃すこともあり得る。

たとえば、仏陀としての自覚に到達する前夜、もしくは入滅の前夜など、これらの異常経験を記述するために特殊な表現方法が必要であった。したがって、その文献を解読するためにはそれに相当する知識が必要である。

その解説によつて仏教の教理につき、一般的に宗教的真理について知ることができるのである。(渡辺照宏『仏教』第二版、岩波新書、七八頁)

ここには報道記事と宗教学の記述とが対比して説明されていて、前者が「ただの事実」を述べるものであるのに對して、宗教学は「宗教的事実」を伝えることを唯一の使命とするものであることが述べられています。さらに、宗教的事実あるいは宗教的真理を述べているにかかわらず、それが「事実の描写という形式によつて」述べられているとも言われています。つまり宗教学も報道記事も一見同じように事実を描写するかのような仕方です。事柄が述べられているものですから、それを読む人は両者が同じ性質の事実を述べているように受け止めてしまう過ちを犯す危険性があることを指摘しているのです。ですからその過ちを回避させようとして「実証主義的な方法で仏教聖典を見る場合には、事実を誤るのみではなくて、重要な要素を見逃すこともあり得る」ことに注意を促しています。このことはこれから仏典を読もうとされている皆さん方には是非とも記憶に留めておいていただきたいと思います。

もし皆さん方が仏典の記述を報道記事の記述と同様に考えてお読みになるとすれば、きつと単に荒唐無稽な作り話であるとか、仏陀を偉人化しようとするものに過ぎないとか、というような読後感を持たれるだけに終わってしまいます。それではとても仏典を学ぼうという気持ちにはなれません。それでは宗教学が描こうとしている宗教的事実とはどのようなことを指すのでしょうか。その一例として仏陀の誕生に関する仏伝の記述を取り上げて見てみることにしましょう。

仏陀の誕生は玄奘の旅行記『大唐西域記』にその伝説が記録されています。玄奘は七世紀頃に中国を出発し、タクラマカン砂漠を横切り、ヒマラヤ山脈を越えて、はるばる十七、八年もの歳月をかけて、インドに仏教を求めて旅をしたお坊さんです。孫悟空の三蔵法師のモデルにされている方です。そこには次のように語られています。

菩薩は生まれられるや、手助けなくして四方に行かれること各七歩されて、自ら、「天上天下、唯我のみ尊し。

今より以後、私の持ち前の生はもはや尽くした（これが最後身であり、今後は輪廻転生することはない）」と言われた。

（水谷真成訳、平凡社、一九九頁）

釈尊が生まれるやすぐに七歩歩まれて「天上天下唯我独尊」と言われたという伝説はあまりにも有名です。入学式の後のオリエンテーション期間中に本廟参拝に行かれた折に山門の所で、白象の上で、右手を挙げて天を指し、左手で地を指している赤ん坊の像をご覧になったかもしれません。それが誕生仏と言われる、釈尊のお生まれになったときのお姿として伝えられているものです。この伝説は有名すぎるほどよく知られていますが、その意図は何かと尋ねられると、なかなか答えにくいように思います。生まれたばかりの赤ん坊が東西南北にそれぞれ七歩歩いて「この世界でただ私ひとりが尊い」と述べたなどという記述は、どう考えても荒唐無稽な作り話しとでも言うより他に説明の仕様がな、という思いがします。

もしあなたが、このような伝記の作られた意図は何かと尋ねられたとすれば、どう答えますか。少し想像力を働かせる人なら、伝記を作った人は、仏陀のような優れた悟りをひらかれるには、生まれつき超人的な能力を備えておられたに相違ないと考えて、その超人性を表現するために、生まれるやすぐに七歩歩まれて「天上天下唯我独尊」と言われたと述べたのだ、と答えるかもしれません。わたしもそのように説明されているのを何度か聞いたことがあります。確かにここにはしばしば指摘されるように、仏陀釈尊の生涯を偉人化しようとする後世の仏教徒の意図がはたっていることは明らかです。とはいえこの伝説は釈尊を何の根拠もなく偉人に仕立て上げたり、神話化したりすることを目的とするものではありません。なぜならここには釈尊の偉人たる所以が明瞭に述べられているからです。釈尊自ら「唯だ我れひとり尊し」と宣言された理由が述べられています。それは「今より以後、私の持ち前の生はもはや尽くした」という言葉によって表明されています。この言葉を訳者の水谷氏は「これが最後身であり、今後は輪廻転生することはない」と解説されています。つまり、いま生きているこの人生が最後の生涯であって、この人生が終わ

ればもはや生まれ変わることはない、と述べているのです。

この伝説が述べる釈尊が尊い人とされる理由について考えてみたいと思いますが、そのためには「輪廻転生」という古代インドの人々の考え方について、多少知っておいていただく方が理解していただき易いかと思いますので、少し寄り道をします。

一九九九年の夏に大学の研修旅行で学生諸君と一緒にブータンという国に行ったことがあります。ブータンはヒマラヤ山脈中にある、チベットやネパールと隣接する王国です。ネパールはイスラム教やヒンズー教が盛んな国ですが、ブータンはチベット仏教を取り入れた信仰心のあつい仏教国です。二名の現地人ガイドが案内してくれましたが、彼らはまだ三十歳になるかならないかの大変好感のもてる若者でした。少人数のツアーでしたから、マイクロバスの中で学生たちはすぐに彼らと仲よくなり、色々な話をしていました。話がたまたま輪廻転生のことに及びました。二人の若者は当然のようにその存在を信じていると言いましたが、学生たちは信ずることができず、二人が信ずる理由を尋ねました。すると若者の一人が、自分の弟の話をしました。

彼の弟はまだ言葉も充分に話せないときに、並べられている食器の中から幾つかのものを指して自分のものだと言ったそうです。それがすべて彼のお祖父さんが使っていたものだだったので、家族は彼がお祖父さんの生まれ変わりであることが分かったのだそうです。若者の話は学生たちを納得させたようには見えませんが、彼はそういう話をこれまでも外国の観光客に何度もして同じような反応を経験したのでしよう、学生たちの反応に対して特別な表情を示しませんでした。自分は自分の信じていることをただ述べただけだというような表情をしていました。

私は同様の話をダライラマの伝記を映画化したものなどで見たことがありましたから、彼の話もその種の物語りに基づくものかとも思いましたが、数日間の彼の誠実な仕事ぶりからして、彼が作り話をしたとは思えません。やはり彼はそう信じているのだと思いました。ブータンの典型的な民家の中を案内をしていただきましたが、最も驚

いたのは仏間が立派なことでした。十畳はゆうにあると思われる部屋全体が仏壇風にきらびやかに荘厳されて作られているのです。そこで家族は全員朝夕お参りをするということです。若者も仕事に行く前と帰って来てからとに必ず家族の幸せと良い来世を祈ってお参りをすると言っていました。

ブータンに行つて現実の生活の一端に触れてみて、輪廻転生を信ずるか否かということが、ただ来世に生まれ変わることを信ずるか信じないかという違いだけを意味する訳ではないということが分かりました。ものの考え方そのものが、われわれとは違います。ですからわれわれの考え方を基準にして異なった文化の在り方を理解すると過ちを犯すことになります。

輪廻転生という古代インドの考え方を理解していただくために、少しわき道に入り込み過ぎたかもしれませんが。話を元にもどしましょう。それではどういう世界を生まれ変わり死に変わりするかといえば、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天という世界です。それを六道と言います。生き物（有情）は様々な行い（業）をします。善い行い（善業）・悪い行い（悪業）・そのどちらでもない行い（無記業）が、有情の中に蓄積されて、それが次に生まれる世界を決定します。善い行いをした者は人間や天という好ましい世界に、悪い行いをした者は地獄や餓鬼や畜生や阿修羅という好ましくない世界に生まれると考えるのです。

地獄は想像がつくと思います。餓鬼というのは常に餓えと渇きに苦しめられている生き物のことです。畜生は犬や牛など動物、阿修羅は戦の好きな生き物のことです。天とは神々のことです。インドの神さまの名前は意外と皆さんも知っています。弁天さんという名で親しまれている弁財天。大阪の有名なお寺にお祭りされている、持国・増長・広目・毘沙門の四天王。寅さんの映画でよく知られている、葛飾柴又の帝釈天など、名前を挙げていけば、たいいてい一度はお聞きになったことがあると思います。古代のインドの人々はそういう六種類の生き物に生まれ変わり死に変わりするものと信じていたのです。

我々の考えからすれば、何度も生まれ変わることができるのなら幸せではないかと思いますが、古代のインドの人々はそうは考えませんでした。釈尊がお生まれになるよりはるか以前のインドでは、人は死ねばヤマ神の天国に行き、そこで安楽な生活を送るものと考えていましたが、時代が進むとともにそのような樂觀的な考え方はできなくなり、死後にもう一度死ぬ苦しみを味わわなければならない、「再死」を経験しなければならないという恐怖の觀念が人々を苦しめることになりました。そして釈尊がお生まれになった頃には、再死という考え方はさらに輪廻転生という考え方を生み出し、繰り返す苦しみを味わわなければならないという考えが人々を恐れさせ苦しめていたのです。それが釈尊の時代の人々の考え方でした。

現代ではインドでもブータンでも、人々は輪廻転生ということを必ずしも苦とはとらえていないように思われます。先ほどのブータンの若者も「また生まれ変われるのだから、私は死ぬことをそれほど恐ろしいことだとは思いません」と笑って語っていましたから、輪廻転生することを苦と考えているようには見えませんでした。輪廻転生に対する受けとめ方は現代では古代とずいぶん異なっているように思います。

われわれ現代人には迷信としか思えませんが、釈尊がお生まれになった頃の、沙門やバラモンと呼ばれる、当時を代表する思想家や宗教者たちの最大関心事は、輪廻転生の恐怖からどうすれば解放されるかということでした。あらゆる生き物はそれぞれ自分自身が行った行為（業）のエネルギーによって、無限の過去から生まれ変わり死に変わりを繰り返す、その度に生の苦しみと死の恐怖におののきつつ現在に至っているものと考えられていました。沙門の代表者である六師外道や、インドの伝統的な宗教者であるバラモンたちのような、当代を代表する学者や求道者の願いは、ひとえに輪廻転生の恐怖と苦悩から解脱することにあります。

『沙門果経』という經典には六師外道がどういう思想の持ち主であったかが述べられています。彼らの中には、人間は死ねば、彼を構成していた五種類あるいは七種類の構成要素に分解されてしまつて、彼がした善い行いも悪い行

いも彼の死後には何の影響も与えないから、生きている間はせいぜい快樂を追求すべきだという、極端な主張をする者がいたとされています。しかしそのような一見輪廻転生することを否定しているように見える主張も、実は輪廻転生の恐怖から目を逸らすことによって、それから逃れられるように考える現実逃避のように思われます。ですから、それを否定する者をも含めて、六師外道の心を悩ませていたのは輪廻転生の恐怖であつたと言えます。釈尊が王位を捨てて出家をし求道の生活に入られたのもそれからの解脱を求めていることであつたと伝記は伝えています。

釈尊はその生涯をかけてその解脱の道を追求し、そしてそれを発見されたのです。釈尊が発見されたのは、有情を輪廻転生の苦に縛り付けているものは業ですが、それから解き放つものは智慧であるということでした。古代のインドの人々にとって智慧は輪廻転生の恐怖から解放してくれるかけがえのないものでしたが、現代のわれわれにとっても智慧は人生の様々な苦勞や困難を克服するために欠かせないものであることを釈尊は經典の中で教えています。それが皆さんがこれから仏教学を学ばれる目的でもあります。われわれが生きて行く上で無くてはならない智慧、それはどうすれば獲得できるのか。その方法を初めて悟った人がいま誕生された。そう考えてこの伝説の作者は生まれられたばかりの釈尊に「天上天下唯我独尊」と宣言させたのです。智慧の獲得に生涯を捧げる人こそ本当に尊い人であるということを示そうとしてそのように宣言させたものと考えられます。

この伝説が釈尊を「持ち前の生を尽くした「人」と言い、「これが最後身であり、今後は輪廻転生することはない「人」と述べるのは、過去の数多の生涯において修行を積まれた結果、輪廻転生をもたらす業の力を減し尽して、もはや再び生まれ変わることのない人として、輪廻の最後の生涯に生まれられた人であることを賞讃するためだと考えられます。釈尊が偉人として讃えられるのは、輪廻転生の苦悩から解脱する資格を備え、そのことを完成するための最後の生涯に生まれられたからなのです。

ですから「唯だ我れひとり尊し」という宣言の言葉は、輪廻転生の苦悩から解脱する資格を備えた人こそ尊しとす

る「仏教の目標」を表明しようとしたものだとも言えます。単に王子シッターを偉人化したり、その能力の偉大さを誇示しようとしたものではありません。あるいは近年しばしば解釈されるように、人間はすべて生まれつき尊いものだとする「人間の尊厳」を示そうとするものでもありません。

七という数字は古代インドでは物事の完結を示す満数としても用いられたようです。ですからここでは七歩歩まれたという記述は輪廻を満了されたことと関連させて述べられていると考えられます。そのことを考え合わせると、学生時代に旧師から、「七歩」歩まれたという記述は輪廻の境涯である「六道」を一步超えられたことを意味するのであり、荒唐無稽な作り話で釈尊を神話化したり偉人化したりしようとするものではない、と教えられたこともよく納得できるように思われるのです。

生まれたばかりの赤ちゃんが七歩歩いて「天上天下唯我独尊」と言ったという、まったく荒唐無稽な作り話とは思えない伝説も、以上のように、その言葉が語られた文脈をよく考え、当時の思想界の状況を考慮すると、その意図がよく分かるようになります。これから演習Ⅰの授業を初めとして仏典の読み方を一緒に勉強していきましょう。

（本稿は、平成十八年四月二十一日、大谷大学メディアホールで行われた仏教学会新入会員歓迎記念講演の筆録に筆者が若干補訂したものである。）